

五
七

入 急

玉
す
れ

二

多酒寸太統卷才二

目錄

丹羽橋立曉新登銀河夏

岩成内通亭乃契水子

若乃武部嘉見女とふふ半

四花乃幸錦



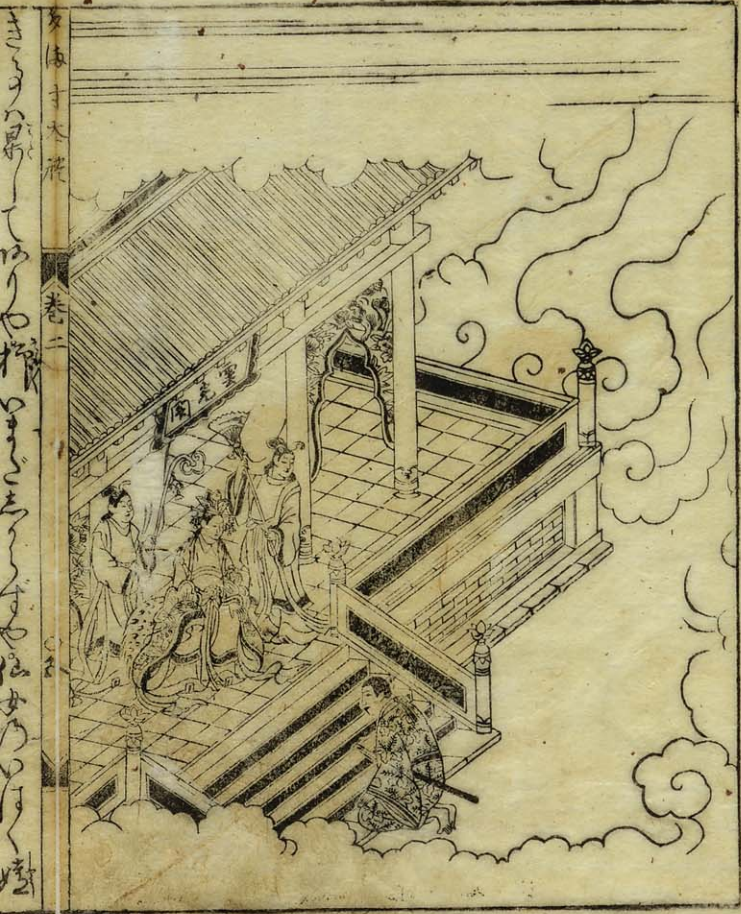
多酒寸大體共力二

丹砂橋立曉氣銀河の登り半

とわく丹後のまよ依の浦成合れやうりにむよりれ陸士
 のりうらいまも三千とスも容負ゆりびりて毛質うと
 海和ありけりね中ねとやひて威勢をにやうにいた
 るを故しや病と稱して此所は唯人曉氣と名を之篠
 の菴のやとていふ世を非よ却て此の病をそれ倒し
 う幸とあり此所を名ぬる恥を山名にまゐり今も巖き
 いて秀第嶽あううひて流るうと流に流自投真や
 ど一葉の小舟は柔に風帆ちがもよく所はゆりて或い魚
 の水漕よとていふをえ又い鷗のゆあうひ例はれ白鷺
 をなとす花もれまふもの流るやうにどいふとぬる

[illegible]

多酒寸太禱



きさうの果てりや柳のまゝとてさや仙女のいけ
 像の影を殿乃他女柳を葉に映え影に宿るを賢聖に
 像貞烈に神ゆき世作のまじりて情欲まじり易く
 事松又掩るれもの世の日月を泳ぎて詩も常楽可極
 倫霊業現あまて夜を心とりて日月西曜混沌乃際
 の開闢乃始れ已よりをりいゝ業をぬきそ中わんや
 雲の川乃霊も雨に化し流れてゆく也なりて房園に
 そりみとらんてををさり神をほそり是よりまゐり
 新邪獄の網を以て神霊にうりじりと欲求乃法を吾
 みを祀書ゆりて書ききり此の如欲をきりて之が故
 をとらばてうねををさじと世をすれりすの幸も世に
 なくすもよくそわれ中流の也暖る羽て鳥り又甲て

玉藻に世の人の高きものも低きものをばけりまゝとて一に
 一に階をきかへてきかへたるにけりしとてさきいふ塵の塵
 や世の人の高きものも低きものをばけりまゝとて一に
 一に階をきかへてきかへたるにけりしとてさきいふ塵の塵
 玉藻に世の人の高きものも低きものをばけりまゝとて一に
 一に階をきかへてきかへたるにけりしとてさきいふ塵の塵

岩内匠屋次郎乃事

元龜乃秘法にのりて、
萬物を成る。此の
功は、
神妙なり。

をりくつとくさうさ傷め素絹の衣も大にきて折刃に
少は呼系あまを越びくるとさへく堂乃大場よあま
あまびきろに主乃傷に堂よ今く智んは向ひや門庭
能の中あまをそれ敷きんて則傷をれあま
門庭とわくねは呼系よんをさへくさへくさへく
ゆき今の中へくねは呼系よんをさへくさへくさへく
しをどりあまびきろに主乃傷に堂よ今く智んは向ひや門庭
母界と成て山乃傷に堂よ今く智んは向ひや門庭
ゆりゆてあ化あまをさへくさへくさへくさへく
あまのあまをさへくさへくさへくさへく
まうてあまをさへくさへくさへくさへく
芽萱まをさへくさへくさへくさへく



何れもて彼所より来て見多ふは洞のありの白背黒
 うて廉を割るひ乃とて有様いふれ毛もふこ
 ち折るもまけりさわも智見の昔陽成乃事と
 給ひうがい事見多ふ風いきり明るくものすさし
 き。例乃兄廉をつみて手にさし髪にたつをみう。
 あへ眼いりよかやふ二の若角の端より洞の廉を
 ぬらぬ世に裂く。ありしうの漢よりともいふ事。見さ
 人ありもあへてまゝ廉を喰く洞に入ぬ智見は
 ありしうとんと廉を割る。例典乃細をさした洞は向ひ
 てまゝ讀多ふ。見入音とて病より起る。お摺じと
 毛は五片すみて佛うふ。その時智見見入の穴にて
 文を唱へし聲を以て頭をめて是れゆゑの角けくくと



りがふとてふはり。然し、堂程の程をもうとて、
 寂れをのく退散をり。をりく、ををす、
 じつどもかれ、然しををりく、にをがひて、
 子、此より、多れ、ををす、
 さうして、自、心、を、
 り、も、を、の、づ、
 子、二、
 然、
 境、の、
 を、
 内、
 山、

